

末代の衆生を、往生極楽の機にあてて見るに、
 行すくなしとても疑うべからず、一念十念に足りぬべし。罪人なりとても疑うべからず、罪根ふかきをもきらわじと宣給えり。時くだれりとても疑うべからず、法滅以後の衆生なおもて往生すべし、況や近來をや。我が身わろしとても疑うべからず、自身はこれ煩惱具足せる凡夫なりとの給えり。十方に浄土おおけれど西方を願うは、十悪五逆の衆生の生るる故なり。諸仏の中に弥陀に帰したてまつるは、三念五念に至るまで自から來迎し給う故なり。諸行の中に念仏を用うるは、彼仏の本願なる故なり。いま弥陀の本願に乗じて往生しなんに、願として成ぜずという事あるべからず。本願に乗ずることは信心のふかきによるべし。受がたき人身をうけて、あいがたき本願にあいて、おこしがたき道心を発して、

はなれがたき輪廻の里をはなれて、生まれがたき浄土に往生せんこと、悦の中の悦なり。罪は十悪五逆の者も生ると信じて、少罪をも犯さじと思ふべし、罪人なお生る。況や善人をや。行は一念十念なおむなしからずと信じて、無間に修すべし、一念なお生る況や多念をや。阿弥陀仏は不取正覚の詞を成就して、現に彼国にましますば、定めて命終の時は來迎し給わん。釈尊は善哉我が教えに随いて生死を離ると知見したまい、六方の諸仏は悦ばしき哉我が証誠を信じて、不退の浄土に生ると悦び給うらんと、天に仰ぎ地に臥して悦ぶべし。このたび弥陀の本願にあう事を。行住坐臥にも報ずべし、かの仏の恩徳を。頼みてもたのむべきは、乃至十念の詞、信じても猶信ずべきは必得往生の文なり。